東京外国語大学総合文化研究所　総合文化研究　第 24 号（2020）
Tokyo University of Foreign Studies, *Trans-Cultural Studies*, Vol. 24 (2020)

オンライン講演「『アメリカの黒人』とは
――文学を通して考える」を視聴して

安島里奈

連続セミナー「Black Lives Matter 運動から学ぶこと――多文化共生、サステイナビリティについて考えるために」では、第 1 回に本学名誉教授でアメリカ文学・文化研究者の荒このみ先生を招聘し、「『アメリカの黒人』とは――文学を通して考える」というタイトルで講演をしていただいた。なお、この講演はオンライン上で行われた。

講演では、BLM についての明快な説明の後、「アメリカの黒人」という呼称をめぐる問題や、その歴史、20 世紀のアフリカン・アメリカン文学が取り上げられた。講演の後半では、本学教授の沼野恭子先生が質問とともにコメントを述べられ、荒先生との対談や質疑応答が行われた。

今や世界中に拡散している BLM 運動だが、Black Lives Matter「黒人の命は大切」（と荒先生は訳された）運動は何も最近始まったものではない。この運動が起こる直接のきっかけとなったのは、2012 年に黒人少年が自警団員に銃殺されたことである。この事件の翌年、2013 年には 3 人の黒人女性によって Black Lives Matter というハッシュタグが既に作られていたという。今までの黒人の差別撤廃運動や抗議運動には指導者がいたのとは違い、この運動にはカリスマ的指導者やリーダーはおらず、組織化もしていないのが特徴である。加えて SNS というツールを用いることで運動の輪が広がり、黒人差別問題への意識が高まったのも特徴であろう。

「アメリカの黒人」をめぐる歴史や法律、その呼称の問題に関するお話の中で特に印象に残ったものについて記しておきたい。講演のタイトルにもあるように、アメリカの黒人ではなく、カギ括弧つきでの「アメリカの黒人」であることに注目せねばならない。彼らは African-American と呼ばれ、American とは呼ばれないのだ。白人側に規定されたこの呼称からハイフン以前が外れない限り、平等にはなれない。黒人とは、肌の色の問題ではなく、わずかでも黒人の血が入っていれば黒人なのだという。白人と黒人の「混血」ムラート／ムラータが誕生するということは、白人が関わっているわけだが、彼らが生まれた背景には、奴隷＝財産扱いであった黒人を、白人が増やす目的があったのだという。また、黒人の血が入っているが白人のふりをする、パッシングについても述べられていた。

こうした黒人差別を取り巻く問題を、20 世紀のアフリカン・アメリカン作家たち――ゾラ・ニール・ハーストン、ラングストン・ヒューズ、リチャード・ライト、ラルフ・エリスン、トニ・モリスン――は当事者の目線から文学作品に描いていた。では一体、言葉による芸術作品である、文学ができることとは何なのだろうか。この問は講演においても後半の荒先生と沼野先生の対談においても中心をなしていた。

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

コメンテーターを務めた沼野先生は、4 つの論点（言葉／呼称の問題、差別的表象の問題、文学の役割とは何かという問題、BLM 運動を受け止めて理解しようとする私たちの受け止め方の問題）を挙げられた。そこでは、差別用語の語感の変化や、単に差別用語を禁止すれば差別がなくなるわけではないということ、文学作品や映画等における差別的な表象・表現をなかったことにしたり、歴史的事実・背景を抹消したりしてはならないといったことが主に述べられた。また、当事者である黒人の作家たちによって社会問題が文学作品に可視化されたことの重要性も指摘された。トニ・モリスン『青い眼がほしい』では、「弱者の中の弱者」である黒人の少女ピコーラが読者に可哀そうだと思われるだけに終わってしまうのを回避するために、語り方を複雑にし、その表現方法により読者に物語を「再構成」させるという。沼野先生は「これこそ文学が単なる差別を糾弾するメッセージや檄文ではなく芸術作品であるゆえん」とし、「現実を単純化しメッセージにするのではなく、複雑な現実を丁寧に掬い取ってその作家ならではの方法でもって読者に送り届けることこそ、文学の価値」だと主張する。荒先生によれば、トニ・モリスンのテクストが複雑であるのは、奴隷制度が起承転結のはっきりした物語ではないということによるともいう。トニ・モリスンは言葉によって白人の価値観や体制の価値観を解体する。『青い眼がほしい』の中では冒頭箇所も含め、アメリカの理想の家庭を描いた初級読本『ディックとジェーン』のテクストが度々引用されているのだが、その引用テクストを、大文字を小文字にし、句読点をなくしていくという方法で「解体」する。モリスンは言葉によって読者に「なぜ」という問いかけをし、読者を立ち止まらせ、読者に解釈を任せる。

沼野先生はコメントの最後にトニ・モリスンが 1993 年にアフリカン・アメリカンの女性作家として初めてノーベル文学賞を受賞したときの記念演説（荒先生翻訳『アメリカの黒人演説集』所収）を一部引用し、次のようにいう。「目の見えない賢いお婆さんに子供たちが聞きます。まるでお婆さんを試すかのように『僕の手の中の小鳥は生きているか、死んでいるか』と質問するのです。モリスンは、『小鳥』が言葉で、『お婆さん』は作家だといい、ずっとその比喩を用いて寓話的に語っています。言葉（＝小鳥）が生きるか死ぬかは、それを握っている手に責任があるということだ、というのです。」

BLM 運動は個人の意識での参加が求められていること、人種主義は教育と世間によって作られるということ、また、手中にある言葉を生かすも殺すも我々次第であると講演において話されていたことからもうかがえるように、差別問題には一人ひとりの意識と取り組みが必要なのである。

文学を通して人間の心の動きが分かり、当時のことも分かると荒先生はおっしゃっていた。文学は決して無力ではないということも、この講演のメッセージだったように思う。

チーム写真。後列右から 2 番目が荒先生、後列中央が沼野先生。

連続セミナー「Black Lives Matter 運動から学ぶこと——多文化共生、サステイナビリティについて考えるために」
第 1 回講演　「アメリカの黒人」とは——文学を通して考える
日時：2020 年 10 月 21 日（水）
場所：Zoom ウェビナーでのオンライン開催
講師：荒このみ先生（東京外国語大学名誉教授）
共催：多文化共生研究創生 WG、総合文化研究所
コメンテーター：沼野恭子（東京外国語大学）
司会：武内進一（東京外国語大学）
全体コーディネーター：中山智香子（東京外国語大学）